

# 自分を語る旅行者

シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』

畑 浩一郎

## はじめに

シャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅程』（1811）が文学ジャンルとしての「旅行記」にもたらした影響については、多くの専門家が指摘するところである<sup>1</sup>。十九世紀前半に流行を見せるいわゆる「オリент旅行記」はこの作品を嚆矢とし、多くの作家たちがこれ以降、彼に倣う形で中近東にまつわる紀行文を発表していく。その反響については、著者自身が後になって次のように語るほどである。「私はそれゆえ、道筋を開いたというきわめて小さな功績と、その道筋が私の後に続かれたというきわめて大きな喜びを持った<sup>2</sup>。」

実際、十九世紀の前半において『パリからエルサレムへの旅程』を考慮せずに「オリент旅行記」を書くことは、ほぼ不可能である。たとえばラマルチヌは、自らの紀行文を説明するのに、この偉大な先駆者の名前を引いて次のように言う。「彼は巡礼者として、騎士としてエルサレムに行った。[中略] 私はただ詩人として、哲学者としてそこを通過したのだ<sup>3</sup>。」またマルセリュス伯爵は、自分の旅行記があまりにシャトーブリアンのそれと酷似していると批判されたとき、次のように答えている。「もしそうだとすれば、[中略] これ以上の賞賛は望みようがない<sup>4</sup>」。そこから距離を取るにせよ、あるいはその例にならうにせよ、これ以降、少なくともオリентにまつわる「旅行記」を執筆しようとする人間にとって、『パリからエルサレムへの旅程』は、巨大な「規範」として現れるのである。

<sup>1</sup> 同著作についての最新の研究は、次の論文集にまとめられている。*Le Voyage en Orient de Chateaubriand, textes rassemblés et présentés par Jean-Claude Berchet, Manucius, 2006.*

<sup>2</sup> Préface à l'*Itinéraire de Paris à Jérusalem pour l'édition des Œuvres complètes* (1826), dans Chateaubriand, *Œuvres romanesques et voyages*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, éd. Maurice Regard, t. II, 1969, p. 695.

<sup>3</sup> Lamartine, *Voyage en Orient* (1835), éd. Sarga Moussa, Champion, 2000, p. 43.

<sup>4</sup> Comte de Marcellus, *Souvenirs de l'Orient* (1839), Cy.ter [sic] éditeur, 2006, p. 19. マルセリュス伯爵は、エーゲ海のアプロディテ像（別名「ミロのヴィーナス」像）をフランスのものにしたという功績でも知られる。

だが従来の「旅行記」と比べて、この作品は一体どのような点で新しいのだろう。そもそもこの作品が「旅行記」という文学ジャンルにもたらした変革とは何なのか。本論では、『パリからエルサレムへの旅程』の革新性を確認するという作業を通して、「旅行記」というテキストが内包するいくつかの問題を考えてみたい。

## 二つの言説

古来より人は旅をしてきた。交易のため、侵略のため、巡礼のため、移住のため、動機は何であれ、人はそれまで住んでいた場所を離れ、別の土地へと移っていく。新たな土地では、見知らぬ風景を目にし、見知らぬ人々と出会う。時には思いもかけぬ冒険に巻き込まれることもある。そうした経験を記録し、自分以外の人間にも伝えたいと考えるのは自然なことである。こうして「旅行記」と呼ばれる書き物が誕生する<sup>5</sup>。

しかしこのような経緯で生まれた「旅行記」は、まさにそのことによって輪郭の捉えがたい書物として現れてくる。実際、定義することがこれほど困難なテキストが他にあるだろうか。たとえば「詩」や「演劇」「小説」といった伝統的な文学形式であれば、それらを規定する様式、形態といったものがおのずと備わっている。作者はそれらを踏まえてのみ作品を創造することができるのだが、「旅行記」の場合は必ずしもそうではない。何しろある程度の規模の地理的移動を行った者であれば、誰であれ「旅行記」を執筆する権利を持っているのである。地理学者、宣教師、考古学者、政治家、民俗学者、軍人、商人、医者、古美術愛好家など。書き手が異なれば、興味の向けられる対象も異なり、それを描くために用いられる語彙や文体にも当然違いが生じる。執筆の背景にある知識、語りの形式、想定される読者層など、全てがまちまちである。長い間「旅行記」がどの文学ジャンルにも分類されない、いやされ得ないものとされてきたのはこのためである<sup>6</sup>。あるときは「歴

<sup>5</sup> 『十九世紀ラルース大辞典』によれば、最古の旅行記はカルタゴのハノンという船乗りが残した『航海記』*Périples* であるという。ハノンは 60 艘の船団を率いてカルタゴを出港し、ジブラルタル海峡から大西洋に出てアフリカ大陸西岸をたどった。その航海の時期については意見が分かれており、紀元前十世紀から同四世紀までの間であるという。

<sup>6</sup> 「旅行記」の定義に関しては、もはや古典とも言える次の二つの論文を参照することが有効である。Jacques Chupeau, « Le récit de voyages aux lisières du roman », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1977, n° 3-4, p. 536-553. Roland le Huenen, « Le récit de voyage : l'entrée en littérature », *Etudes littéraires*, printemps-été 1987, t. 20, n° 1, p. 45-61.

史」(histoire)と、ある時は「日誌・日記」(journal)と、またあるときは「回想録」(mémoires)と同一視され、「旅行記」は文学の周辺領域をさまよい歩く。「旅」さえそこで話題にされていれば、何を語っても、またどのように語っても許される、というのがこのテキストの特徴である。いわば「旅行記」は「規則なき」ジャンルとして自らを規定するのである。

しかしそれでも「旅行記」に基準が全く存在しないわけではない。どのような著作であれ「旅行記」と見なされる文章をよく観察してみると、それらが二つの異なる性質の言説の間で揺れ動いていることが分かる。ル・ユナンはそれらを「科学的言説」(le discours scientifique)と「文学的言説」(le discours littéraire)と名付けている<sup>7</sup>。

ここで確認しておきたいのは、「旅行記」とはまず何よりも、作者が行った移動の「記録」であり、「報告書」であるという事実である。作者がもし移動を行わなかったのであれば、旅行記が書かれるいわれは全くない。作者の「移動」と旅行記の「執筆」とは表裏一体のものである。

そしてもし「旅行記」が作者の移動の「記録」であるならば、当然そこで書かれていることは原則として「真実」とされなければならない。これは意外に重要なことである。「旅行記」をめぐる議論には必ずと言ってよいほど「虚構」の問題がついて回るが、それは逆に言えば、内容の「真偽」こそ、このテキストの存在意義に関わる大原則であることを示している。もしそれが単なる作り話に過ぎないのであれば、そこにあるのはもはや「小説」と変わりなく、「旅行記」であることの必然性はない。確かに実際の作品創造の現場では、この原則は往々にして破られることになるのだが、ここでは「旅行記」というテキストには、基本的に、見知らぬ土地についての正確な情報を伝えるという、ある意味学術的な側面があるということを指摘しておきたい。

旅行記作家が自分の記述の「真実性」をくどいまでに強調するのは、まさにそのせいである。多くの場合「旅行記」には「王への献辞」や「序文」といったいわゆるパラ・テキストが付されている。この場では通常、旅行が行われるに至った経緯や、旅行記執筆の動機が説明されるのだが、非常にしばしば、そこで、この後に続く文章がいかに「本当」であるかが強調されるの

---

また次の論文集もこの問題に新たな見取り図を与えてくれる。Écrire des récits de voyage (XV-XVIII<sup>e</sup> siècles), Esquisse d'une poétique en gestion, textes réunis et présentés par Marie-Christine Pioffet, Presses de l'Université Laval, 2008.

<sup>7</sup> Le Hunec, art. cit., p. 46.

である。たとえば十七世紀末に東インドへの旅行を行ったロベール・シャール  
の例を見てみよう。

私の最大の才能は、自分が知っていることのみを書くことができるということ  
であり、また自分自身で確信していないことについては一切書かないというこ  
とである<sup>8</sup>。

シャールの取る態度は慎重である。「真実」というものは常に新たな反証に  
よってひっくり返される可能性を持っている。語りの内容が「真実」である  
かどうかは作者を含めた誰にも分からない以上、シャールは自分の「知って  
いること」のみを語ると言う。「真実性」(véracité)よりも「真摯さ」(sincérité)  
に重きを置く彼の態度は、「科学的言説」の中でも上質のものである。

旅行記作家にとって記述の「信憑性」は重要ではあるが、しかし同時にま  
たもうひとつ気を配らなくてはならないことがある。「読みやすさ」への配  
慮である。いくらそれが「真実」を伝えるものとはいえ、作家は旅の「原  
資料」、つまり旅行中にとった覚え書や、走り書きのメモ、家族や友人に宛  
てた手紙などをそのまま公表することはできない。順序も関連づけも欠けた  
いわば「生の」テキストは読者を混乱させるだけである。「旅行記」がひと  
つの読み物として自立するためには、こうした材料を「加工」し、「体裁を  
整える」という作業がどうしても必要になる。不明瞭な箇所を書き直し、枝  
葉末節の削除、章立て、序文の追加。たとえそれがどんなに素朴なものであ  
れ、作者はこうした「化粧」を自分の文章に施さずにはいられない。そして  
このような作業が「旅行記」にもうひとつの言説の可能性をもたらすこと  
になる。作品の美的効果の向上を目指す「文学的言説」である。

こうした文章の体裁に関する配慮は、相反する二つの方向へと向かう傾向  
を見せる。ひとつには、読者の好奇心を引きつける「大仰な」文体が追求さ  
れることがある。読者が「旅行記」を読むことに喜びを汲み出すとすれば、  
それはやはりこの種の書物が、異国の風変わりな風物や、旅行者の危険に満  
ちた冒険を伝えてくれるからである。旅行記作家はそれゆえ、時に大げさな  
表現を用いて読者の好奇心をあおることになる。「あなた方は決して信じな  
いでしょうが」(vous n'auriez jamais cru que...)や、「こんな風に言えば、あ  
なた方はさらに驚くでしょうが」(vous vous étonnerez encore davantage quand

---

<sup>8</sup> Robert Challe, *Journal du Voyage des Indes orientales, relation de ce qui est arrivé dans le royaume de Siam en 1688, à Monsieur Pierre Raymond*, éd. Jacques Popin et Frédéric Deloffre, Genève, Droz, 1998, p. 36.

je vous aurai dit que...)といった言い回しは、旅行記作家がしばしば用いる定型句となる<sup>9</sup>。こうした作家の配慮のおかげで、読者は一時的に単調な日常生活から遠ざかることができるわけだが、このような読者の気晴らしについては、フランス語の«*dépaysement*»という言葉によって過不足なく表される。

しかしこうした手法は、時として逆効果となる場合もある。過度の修辞や凝った文体は、それだけで否応なく作者の作為を際立たせ、引いては内容についての信憑性をも疑わせるからである。それを避けるため、今度はできるかぎり「透明な」文体に徹し、それによって記述の「本当らしさ」を確保するということが試みられる。「丁寧で凝った文章を作ることにはいそむよりも、いつもの素朴で単純な文体を選ぶ方がよいと忠告された<sup>10</sup>」とは十七世紀の宣教師ガブリエル・サガールの言葉であるが、このように旅行記作家は、時に、自分の文章がいかにか簡潔で、控えめで、平明であるかを強調する。こうした文体上の配慮は言うまでもなく、「真実」を伝えるという「旅行記」の性格に起因しているのである。

旅行記を特徴づける二つの言説はそれゆえ、それぞれ独立してテキスト内に存在しているわけではない。記述の「真実性」と「読者の好奇心」への配慮は、今見たように、互いに影響し、双方を支え合う形でこの特異なテキストを成立させているのである。後に触れるように、時代によって、また作家によって、どちらかの極により強く振れるということはあるにしても、「旅行記」は基本的にこのふたつの言説——ル・ユナンの言う「科学的言説」と「文学的言説」——の間を揺れ動いている。シャトブリアンの「オリエント旅行記」はそれを決定的に「文学」の側へ引きつけることになるのだが、結論を急ぐ前に、もう少し「旅行記」というテキストについての考察を続けてみよう。とりわけ『パリからエルサレムへの旅程』が刊行された当時の「旅行記」をめぐる状況がどのようなものであったのか、具体的な例を引いて見ておきたい。

<sup>9</sup> この問題については、Pioffet の前掲書 p. 3-4 を参照のこと。ここに挙げた二つの表現は Pioffet が以下の著作から引いたものである。Jean-François Regnard, *Voyage en Laponie, dans Voyage des poètes français aux XVIII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles*, Ch. Delagrave, 1888, p. 127.

<sup>10</sup> Gabriel Sagard, *Le Grand voyage du pays des Hurons* (1632), cité par Marie-Christine Pioffet, *op. cit.*, p. 2.

## 航海者のためらい

ここで取り上げるのはブーガンヴィルの『世界周航記』である。パリ生まれのこの軍人は、フランス人として初めて世界一周旅行を行ったことで知られるが、その航海についてもう一度おさらいしておこう。1766年11月5日、巡洋艦ブードゥーズ号はナントを出港、大西洋を横断し、南米のリオ・デ・ジャネイロで輸送艦エトワール号と合流する。マゼラン海峡から太平洋へ入り、数ヶ月前に英国人ウォリスによって発見されたばかりのタヒチ島に上陸。サモア、ソロモン諸島を抜け、ニュー・ギニアを経てインド洋へ。喜望峰をまわって大西洋を北上、サン・マロに帰港したのは1769年3月16日のことである。ちなみにこれより数ヶ月前、1768年9月4日に、シャトーブリアンがこの同じブルターニュの港町サン・マロで誕生している。

ブーガンヴィルは航海中いくつかの島を発見している。その中には、後に彼の名前が冠されることになるパプア・ニューギニアのブーゲンビル島——ちなみに太平洋戦争中ここは日米両軍による激戦の地となる——が含まれているが、ここで確認しておきたいのは、シャトーブリアンが誕生した当時、人類はまだ世界について正確な地理的概念を持っていなかったということである。十五世紀末以来のいわゆる「大航海時代」から累々とつらなる「探検旅行」の伝統はいまだに終わりを迎えていないのである<sup>11</sup>。

ブーガンヴィルは帰国後その航海記をまとめ、1771年に『世界周航記』として発表する。これに感銘を受けたディドロが後に『ブーガンヴィル航海記補遺』を執筆したことはよく知られているが、ここで注目したいのはブーガンヴィルが自らの旅行記に付した「序説」*« discours préliminaire »*という文章である。ここで作者は自らの航海記について説明を加えているのだが、その内容は「旅行記」というテキストを考える上で興味深い。

ブーガンヴィルはまず、彼より以前に太平洋で探検を行った全ての冒険家の名前と業績を上げることから始める。マゼラン、タスマン、ダンピアなど名だたる航海者たちの功績を列挙した後、彼は読者に向かって次のような注意を促している。

---

<sup>11</sup> 1791年にシャトーブリアンが行った北米大陸への旅行の目的も、少なくとも彼自身の言葉によれば、「北西航路」を発見することにあつた。当時、北米大陸の北側の状況は人類には未だよく知られておらず、それが北極圏を通過してグリーンランドに続いているのか、あるいはハドソン湾とベーリング海峡をつなぐ海域（現在の北極海）によって隔てられているのか不明であつた。Voir Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe* (1848), éd. Jean-Claude Berchet, Classiques Garnier, 4 vol., t. I, 1989, p. 383.

私に委ねられた遠征の物語を始める前に、この記述を娯楽のための書物と考えないでほしいとお断りしておきたい。それはとりわけ船乗りたちのために書かれたのである<sup>12</sup>。

ブーガンヴィルはこのように、「旅行記」を成り立たせるふたつの言説のうち、まず実証的な価値を重んずる方——ル・ユナンの言う「科学的言説」——から始める。これから読まれる文章は、偉大な先達たちの例に倣って行われた航海の「記録」である。それが書かれたのは、今後人類が世界についての知識をさらに拡充する際の資料として役立つためであり、したがって気晴らしを求めてそのページを開く読者は、味気ない思いをするであろう、と著者は警告する。

ブーガンヴィルが「序説」でこのように主張することは、逆に言えば「旅行記」はこの時代、しばしば「娯楽のための書物」と見なされていたことをも暗示している。実際、前世紀以来、とりわけルイ十四世治下のフランス宮廷では「旅行記」は時に「科学」よりもむしろ「文学」の領域に近づく傾向を見せ、「旅物語」は貴族たちが愛好する読み物のひとつとなる<sup>13</sup>。それは自宅にいながらにして、インドやアフリカなどの珍しい風物について教えてくれ、また航海者の危険に満ちた冒険は、それらを直接経験することなく彼らの好奇心を刺激してくれる。シュポーはこうした「旅行記」の楽しみ方を「肘掛け椅子に座った旅」(voyage dans un fauteuil)と表現しているが、ブーガンヴィルは、いたずらに読者の好奇心をあおるこうした「旅行記」から距離を取ろうと試みるのである。

しかし興味深いのは、ブーガンヴィルはこのように述べた後、まるで振り子の揺り戻しが起こるかのように、もうひとつの言説の方へ移行するのである。作者は時を置かず、著作の「文学的側面」への配慮を見せる。

そもそも地球をめぐるこの長い船旅は、戦時においてなされた航海のように、社交界の人々にとって興味深い情景には恵まれていない。私に文筆の習慣があって、内容の無味乾燥さを表現が一部分でも救えればよかったのだが<sup>14</sup>。

---

<sup>12</sup> Louis-Antoine de Bougainville, *Voyage autour du monde*, éd. Jacques Proust, Folio classique, 1982, p. 45

<sup>13</sup> 十七世紀フランスにおける「旅行記」の流行については、シュポーの前掲論文を参照。

<sup>14</sup> Bougainville, *op. cit.*, p. 45-46.

作者は自分の著作の学術的価値を強調しておきながら、その舌の根も乾かぬうちに、読者の興味をかき立てる「ロマネスクな」読み物への未練をあらわにする。そしてそれがかなわぬ夢であることを確認すると、自分の文学的素質について詠嘆の念を漏らすのである。

ここには旅行記作家が抱えるジレンマがよく現れている。自分の著作は「真実」を伝えるものである。それゆえもつばら読者の「楽しみ」のために書かれる著作、たとえば「小説」などとは同一視してもらいたくはない。しかしだからといって、読者の興味をまるで引かないのも困るのである！ それでは単なる無味乾燥な学術書と変わらないことになってしまう。作者はそれゆえ、「文体」や「修辞」の力によって読者を引きつけようと試みる。しかし相反するとは言わないまでも、性格の異なる二つの言説を同時に成り立たせるのは容易ではない。プーガンヴィルが次のように言うのは、諦念の表れなのか、それとも謙遜の素振りなのか。

しかし非常に幼い頃からさまざまな学問の手ほどきを受けたとはいえ [中略] 今では私は、科学と文芸の聖域からきわめて遠いところにいる<sup>15</sup>。

「旅行記」というテキストは、ふたつの異なる言説の引き合いによって生まれる微妙な力学の上に成り立っている。プーガンヴィルの「序説」は、そのダイナミズムを垣間見せてくれる。

### 嘘つき旅行者と怠惰な哲学者

プーガンヴィルの「序説」は「旅行記」を支える二つの言説の拮抗をよく示している。しかしこのテキストはこの後、興味深い展開を見せていく。著者はここで突然語調を変え、まるで誰かを糾弾するかのようになりに言うのである。

けだし私は誰かの所説を引用したり、それに異を立てるつもりはない。何らかの仮説を立てようとか、論破しようなどというつもりはなおさらない<sup>16</sup>。

実はプーガンヴィルの「旅行記」の新しさ、その時代的特異性が現れるのは、この箇所である。航海者は明らかにここで、ある種の人々に対して反駁しよ

---

<sup>15</sup> *Ibid.* 傍点による強調は論者による。

<sup>16</sup> *Ibid.*



うとしている。その相手とは誰か。時代を代表する知識人たち、すなわち、いわゆる啓蒙思想を担う「<sup>フィロゾフ</sup>哲学者」たちである。

「哲学者」たちが「旅行者」一般に対して投げかける視線には確かに手厳しいものがある。彼らにとって「旅行者」とは、下等な教育しか受けていない粗野な人間に過ぎず、好んで未開の地をうろついては、根拠のない話をまき散らすろくでもない人種なのである。ディドロとダランベールの『百科全書』は「旅行者」« voyageur » について次のような定義を与えている。ちなみにこの項目の執筆者はジョクールである。

旅行者：さまざまな理由から旅をする人、また時にその報告を行う人。しかしこの点において旅行者は通常、あまり正確さを行使しない。ほとんど常に自分が見たものに、見ることもありえたものを付け加える。旅行記が不完全にならないよう、他の本で読んだことを報告するが、自分たちが最初に誤りに陥るため、それを読む読者まで誤謬に陥らせる。[中略] ストラボンがメネラオスの旅行記について言った言葉、すなわち「旅行記を書く人間は、確かに全て嘘つきだ」という言葉が当てはまらない旅行記はほとんどない<sup>17</sup>。

何とも辛らつな批判であるが、こうした「旅行者」に対する不信は必ずしも『百科全書』に固有のものではない。たとえば『人間不平等起源論』（1755）においてルソーは次のように書いている。

どの旅行記にも、さまざまな人々の性格や風俗が記載されている。ところが著者たちは、こうしたことをさかんに書き散らしながら、誰もが知っていることしか書こうとしないことには、全く驚かされる。世界の果てまで行ったというのに、その気になれば自分の住んでいる街路から一步も出なくても分かるはずのことしか、見てこないのである<sup>18</sup>。

ジョクールとルソーに共通する考えは、「旅行者」には客観的な観察能力が欠如しているということである<sup>19</sup>。この能力がないため、彼らの書くものに

<sup>17</sup> *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers...* (1751-1780), reprint, Stuttgart, Bad Cannstatt, frommann-holzboog, 1967, 35 vol.

<sup>18</sup> Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, dans *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, éd., Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, t. III, 1964, p. 212.

<sup>19</sup> ルソーによれば、旅をする人間というのは、長らく、船乗り、商人、軍人、宣教師の四種類しかいなかったという。前三者が優れた観察者になりえないのは自明であるし、宣教師にしてもその使命は福音を説くことであって、異国の習俗を記録することではない、といずれもその観察力は否定される。

は「嘘」があふれているのであり、せいぜいよくても「誰もが知っていること」しか伝えることができない、とされるのである。

ブーガンヴィルは、こうした批判に対して「旅行者」の立場から鋭く反駁する。彼は自分が用いる「文体」について、へりくだったためらいを見せていたが、次の文章にこめられた痛烈な皮肉を見る限り、その言葉を文字通り取ることはできない。

私は旅行者であり船乗りである。ということは、薄暗い書齋の中で、世界とその住民たちについて際限なく理屈をこねまわし、横柄にも自然を自分たちの夢想に従わせるといった類の怠惰で尊大な著述家の目から見れば、嘘つきで愚か者ということだ。自分自身では何一つ観察したことがなく、彼らが見たり考えたりする能力を認めようとしないうその同じ旅行者から拝借した観察に基づいてしか、著述したりご大層な理論を組み立てたりすることのないこれらの人々からしてみれば、全く奇妙な、考えもつかない振る舞いである<sup>20</sup>。

このような主張に対し、たとえばルソーはどのように返答することができよう。彼の有名な「野生人」についての議論にしても、結局はコルベンやテルトル神父の旅行記に見られる、ホッテントットやカライブ人についての記述を下敷きに「理屈をこねまわしている」だけ、とも考えられるのである。

ブーガンヴィルは、実際に現地に行くことなく、机上の空論を積み重ねる哲学者たちを痛烈に批判する。もし「旅行者」が観察することを知らない「愚か者」であるとするならば、「哲学者」は観察する労すら執ろうとしない「怠け者」に過ぎない。そもそも自分たちが「不完全」と批判する「旅行者」の観察を基礎にして構築された彼らの学説など、一体どこに価値があるというのだろうか。こうして十八世紀の後半に「哲学者」と「旅行者」（あるいは「旅行記作家」）の間の対立が顕在化する。前者が投げかけてくる「嘘つき」という批判に対して後者がよりどころにするのは、他でもなく「自分の目で見た」という厳然たる事実である。

ひとつ例を取ろう。この時代のヨーロッパの知識人に広く受け入れられていたある学説がある。それは諸民族の性格に対する「気候」« climat »の影響である。この説はモンテスキューが『法の精神』（1748）で紹介した後、急速に広まり、諸民族の差異について論じようとする人間は必ず参照を求められるひとつの権威となる。

---

<sup>20</sup> Bougainville, *op. cit.*, p. 46-47.

この説によれば、それぞれの民族の気質の形成には、住んでいる地域の「気温」が大きな役割を果たすという。暑い国では肉体労働が困難なため、人々は休息を好む傾向にある。それゆえこの地方の住民は、おしなべて怠惰な性格となり、肉体的にも精神的にも弛緩する。こうした住民の気質はまた、政治体制にも影響を与え、オリентやアジアでは「専制」が標準となる。また「奴隷制」や「一夫多妻制」が多く見られるのも、この地方の特徴である。反対に北方の国々の住民は、質実剛健で、気性は荒い。ヨーロッパ北部の住民が長らくローマ人を悩ませたのはこのためだが、精神は自由を好み、アジアに見られるような大帝國は存続し得ない。モンテスキューの説を簡単に要約するとこのようになる<sup>21</sup>。

この説に対して真っ向から反対するのが、ヴォルネーである。1782年からほぼ三年にわたってエジプトとシリアを旅行し、帰国後に『シリア・エジプト紀行』（1787）を著したヴォルネーは、この時代を代表する旅行者である。彼の旅行記は、後にナポレオン・ボナパルトがエジプト遠征の際に利用したことからも分かるように、綿密な観察に裏付けられた記述に特徴を持つ<sup>22</sup>。実証精神に導かれたヴォルネーは、アラビア語を身につけるため、シリアのドルーズ派の修道院に八ヶ月間こもることもいとわない。こうした旅行者にとって、モンテスキューの議論が受け入れられないのは自明である。

ヴォルネーによれば、そもそもモンテスキューの議論は、歴史的事実に照らしても全く正当性を欠いているという。もし暑い地方に住む人間が、怠惰で、無気力な性格になるのであれば、北アフリカにカルタゴが、イタリアにローマが誕生したのはどういうわけなのか。アフリカ大陸からイベリア半島に進入し、ポワチエまで進軍したアラブ人は、果たして「無気力」なのだろうか。地中海全域で商業活動を行っていたフェニキア人は「怠惰」と言えるのか。そもそも「暑い」や「寒い」などという曖昧な指標で、民族の性格を議論することができるのか。このような反駁を積み重ねた後、ヴォルネーは次のように言う。

<sup>21</sup> Voir Montesquieu, *De l'esprit des lois* (1748), dans *Œuvres complètes*, éd. Roger Caillois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1951, p. 474 et suit.

<sup>22</sup> ボナパルトはこの著作について「嘘をつくことのなかったほとんど唯一の書物」という奇妙な賛辞を送っている。Moniteur, 5 brumaire an VIII, cité dans Volney, *Voyage en Syrie et en Égypte*, *Œuvres*, éd. Anne Deneys-Tunney et Henri Deneys, Fayard, t. III, 1998, p. 5.

ある国民の活力はいかなる温度によって計ることができるのか、また自由と奴隷制のどちらの傾向があるのかは、寒暖計の上の何度ぐらいで分かるのか、モンテスキューにはっきりと示してもらいたい<sup>23</sup>。

ブーガンヴィルと同様、ヴォルネーもまた、机上の空論をかざす「哲学者」に激しく反発する。自分の目で実際に現地を見た「旅行者」として、具体的な根拠を欠いたこのような議論はいかにも空疎に映るのである。

### 増殖する援用

十八世紀の後半、「旅行記」はこれまでになく実証的な性格を帯びることになる。むろんその傍らでは相変わらず、読者を楽しませる「娯楽のための旅物語」も生産され続けてきてはいるのだが、「自分の目で見たこと」を正確に記述することを信条とする旅行記が現れるようになったのは新しい流れである。そして皮肉なのは、このような流れは、本来、事実の観察や経験に基づく合理的判断を信奉する「哲学者」たちへの反発から生まれたものなのである。

シャトーブリアンが『パリからエルサレムへの旅程』を出版した当時の「旅行記」をめぐる情勢はこのようなものであった。それではシャトーブリアンは、こうした流れにいかなる革新をもたらすのだろう。

記述の「正確さ」にこだわるという点では、シャトーブリアンも前世紀に現れた旅行者たちと何ら変わるところはない。たとえば初版の「序文」の中で、彼は「旅行者の義務とは自分が見たことを正確に語ることだ」とした上で、「旅行者というのは一種の歴史家である<sup>24</sup>」と述べている。これは明らかに、ヴォルネーがかつて『シリア・エジプト紀行』の序文で記した一文、すなわち「旅行記というジャンルは歴史に属しており、小説に属しているのではない<sup>25</sup>」という言葉を意識して書かれたものである。

実際『パリからエルサレムへの旅程』は、一般に考えられている以上に、十八世紀の学術・教訓的精神の痕跡を色濃く残している。この作品は作者の生前、何度か再版されたために、執筆年度の異なる複数の序文が付されているが、いずれの序文においても、シャトーブリアンはその記述の正確さを強

<sup>23</sup> Volney, *Voyage en Syrie et en Égypte*, éd. cit., p. 598.

<sup>24</sup> Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, éd. cit., p. 702.

<sup>25</sup> Volney, *op. cit.*, p. 14. シャトーブリアンはヴォルネーの『シリア・エジプト紀行』を高く評価し、自らの旅行記でも何度となく引用している。

調している。たとえば初版の翌年に出た「第三版」の序文（1812）では、刊行以来批評家から寄せられた「いくつかの反論」に答えた上で、「結局のところ、私は事実の正確さについてはこれを保証する<sup>26</sup>」と言い切っているし、また初版出版から十五年後に出された「全集版」の序文（1826）でも、「この著作が世間に対して持つ価値は正確さだけである。それは廢墟についての宿駅帳である<sup>27</sup>」とされる。明らかにシャトーブリアンは正しい情報を伝えることを重視しており、この点で彼は、後の旅行記作家が見せる「事実」の扱いの奔放さからは、きわめて遠い地平にいる<sup>28</sup>。

シャトーブリアンはしばしば、自分の旅行記に他人の著作を援用する。古典的な手法ではあるが、すでに権威とされている人物の名前を引くことで、誤ったことを記したという批判から身を守ろうとするわけである。

スポン、ウェラー、ポール・リュカ、トゥルヌフォルといった旅行者たちが背後にいれば、私のように取るに足らない旅行者であっても安全である<sup>29</sup>。

実際、シャトーブリアンは出発前に、これから訪れる土地について念入りな下調べを行っている。本人の言葉によれば、エルサレムに関するだけでも二百冊もの著作に目を通したというのである<sup>30</sup>。こうした準備を経た上で旅をする作家の行為が、見知らぬものを「発見する」というよりはむしろ、すでに書物を通じて知っていることを現地で「再確認する」といった様相を呈するのは自然なことである。パレスチナの廢墟を散策する旅行者は、次のような言葉を口にしている。

塔の扉には、ヴォルネー氏が報告するアラビア語の碑文が読まれる。そのすぐそばには、ムラトリが描写しているこの上なくすばらしい古代の遺物がある<sup>31</sup>。

<sup>26</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 709.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 695. 「宿駅帳」と訳した« livre de postes »というのは、街道上のそれぞれの宿場間の距離を記した書物のことで、アンシャン・レージュム期に考案され、1859年に廃止された。

<sup>28</sup> たとえば『東方紀行』（1851）を執筆した際のネルヴァルは、現実の旅行では足を踏み入っていないセリゴ島について、あたかも実際に訪れたかのような記述を行っている。Voir Gérard de Nerval, *Voyage en Orient, dans Œuvres complètes*, éd. Jean Guillaume et Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1984, p. 1376.

<sup>29</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 708.

<sup>30</sup> Voir *ibid.*, p. 981.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 975.

作家の体験は、かつて読んだ著作の思い出に絶えず裏打ちされていく。その結果、彼のテキストもまた、彼自身が参照する歴史家、旅行者たちの著作が織りなす長い「学識」の伝統に組み込まれていくようである。作家の旅はこうして「歴史」の中で重層化され、厚みを増していく。

このようにシャトーブリアンは好んで他者の著作を援用するのだが、ここで注目したいのは、それが時として、異常と思えるほどの膨張を見せるという点である。たとえばヨルダン川の岸辺で、旅行者は川の呼び名の起源について考察を始める。

ダンヴィルによれば、アラブ人はヨルダン川に「ナハル・エル・アルデン」という名を与えている。ロジェ師によれば、それは「ナハル・エル・シリア」だという。マリチ神父はこの名の起源にイタリア語の「シェリア」を見ているし、ヴォルエ氏は「エル・シャリア」と書いている<sup>32</sup>。

シャトーブリアンはこの後も延々と議論を続け、ページは文字通り、彼が援用する歴史家や旅行者たちの名前で埋め尽くされていく。ヒエロニムス、フラウィウス・ヨセフス、プリニウス、エウゼビウス、ラ・ロック、もう一度マリチ神父、ギヨーム・ド・ティール、ルラン…。とどまることを知らずに増殖を続けていくこうした名前の羅列には、異様さすら感じられる。

その印象は、当時の読者にとっても同様であった。先行する専門家の名前が引かれるのは、本来、作者の記述の正確さを保証するためである。しかしそれらが次から次へと列挙されていくと、今度は逆に作者自身の体験に対する信憑性に疑いが生じるのである。『パリからエルサレムへの旅程』の刊行直後に出された書評には、次のような文言が見られる。署名は「Z」となっているが、執筆はおそらく批評家ホフマンである。

シャトーブリアン氏はエルサレムや聖墓を描写する際に、何人もの先達の作家の助けを借りている。もし彼の著作の他のページや、よく知られた彼の性格がそれを保証してくれないのであれば、彼は自分が語っている場所を実際には見えていないのではないかと疑いたくなるほどである<sup>33</sup>。

先ほど見た『百科全書』の記述を思い出そう。ジョクールは、旅行者が実際には見えていないものを語るのに、他の書物を引用することで埋め合わせをす

---

<sup>32</sup> *Ibid.*, p. 1007.

<sup>33</sup> *Le Courrier de l'Europe et des spectacles*, 11 mars 1811 ; cité par Émile Malakis, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1946, 2 vol., t. II, p. 448.

るといって批判していた。しかしシャトーブリアンの場合は反対である。彼は実際に見たものについて語るのに、先行する学者や旅行者を延々と援用し続けるのである。こうした態度は、これまでの旅行記作家の常識からは説明がつかない。

奇矯とも言える作家のこのような振る舞いが最も特徴的に現れるのは、旅行記のアテネに関する箇所である。古代ギリシア文明の中心地であり、スパルタと並ぶエーゲ海最大の都市国家が存在したこの土地に関する記述は、疑いなくシャトーブリアンの旅行記の中でも特別な地位を占めるはずである。ところが驚いたことに、作家は都市について語る労力を最初から放棄する。

おそらくここで私がアテネについて完全な描写を行うことは、期待されていないだろう<sup>34</sup>。

作家はこのように述べると、自分自身の言葉で語る代わりに、この都市について知識を得るために参照すべき著作の名前を、次々と挙げ始めるのである。

ここに見られるのはもはや「旅行記」ではない、とも言えるかもしれない。確かに旅行者が訪れた土地について語らない文章を、どうしてこの名で呼ぶことができよう。しかし実はシャトーブリアンの「旅行記」の新しさはまさにこの点にあるのである。

実際、無数に引かれる歴史家や旅行記作家の名前には、シャトーブリアンのテキストを読み解く鍵のひとつが隠されている。それは一言で言えば、「作者」の地位の特権化である。通常であれば、他者の著作を援用すれば、それだけ作者自身の「声」は弱まることになる。そこで主張される意見は、他人から保証を受ける代わりに、作者個人に対する帰属性を一部失うからである。ところがこのような行為を極端に多く積み重ねた場合、その効果は逆転する。作者の声は弱められるどころか、逆に彼が援用するさまざまな著者たちの声を通して一段とはっきり響き渡るのである。

それは何よりも「援用」という行為が、それを行う者の主体に全面的に依存するという事実起因する。この場でこの著者を引くことの必然性は、作者のみが気づき知るところである。そしてまたいくつかの援用をひとつの束に束ね、文章をさらに紡いでいくための論理もまた、作者ひとりの手に握られている。したがって援用を積み重ねれば積み重ねるほど、それを行う作者の役割は重要性を増してくる。シャトーブリアンはこの操作を推し進める

---

<sup>34</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 858.

のである。彼は、さまざまな著作の著者を縦横無尽に引くことで、いわば間テキスト性のネットワークを編み上げていく。そして彼自身は、あたかも巣の中心にいるクモのように、作品全体を絶えず睥睨しながら、さらにそれを拡大していくのである。ジャン＝クロード・ベルシエは、こうした特権的な地位を持つ「作者」のあり方に着目し、演劇の比喩を用いながら次のように言う。「自我 (le moi) は仮面をかぶって進み、仮装をしてからしか姿を現さない。しかしそれは絶えず演出され、ただ他人の口を通してのみ自分を語るのである<sup>35</sup>」。

こうしたテキストから立ち上がってくる言説は、従来の「旅行記」の枠組みにはとうてい収まらない。「作者」という絶対的な存在を前に「真実」と「虚構」といった対立はもはや意味を失い、また「旅行記」をこれまで特徴付けていたふたつのディスクール——「科学的言説」と「文学的言説」——も、そこに新たに出現する言説、すなわち「自分語り」の言説を前にして、一瞬にして色あせる。

### 「私は永遠に自分について語る」

実は『パリからエルサレムへの旅程』の特徴がこの特権化された「作者」の立場にあるということは、すでに多くの専門家たちが一致して指摘するところである<sup>36</sup>。ここまで行った考察の目的は、この主張を「旅行記」の歴史の中で捉え直し、長らく「旅行記」を規定していた二つの指針——記述の「真実性」と「読者の好奇心」に対する配慮——をこの作品がどのように乗り越えたのかという問題をあらためて検討することにあった。

シャトーブリアンの旅行記は、一見すると、記述の「真実性」という、それまでの旅行記作家が重視していた要素を同じように尊重しているように見える。作家は、さまざまな著者を援用することで、自らの意見に客観性を付与しようと試みているように思えるのである。しかしそれは「見せかけ」とは言えないまでも、多分に別の効果をも射程に置いた振る舞いである。それはまた「作者」の介入を正当化するための「口実」としても機能しているのである。実際、作者はやたらと他人の著作を引き、その意見の正当性を論じ、

<sup>35</sup> Jean-Claude Berchet, « Un voyage vers soi », *Poétique*, n° 53, février 1983, p. 92-93.

<sup>36</sup> 前出のベルシエの論文に加えて、たとえば次の著作を参照。Sarga Moussa, *La Relation orientale*, Klincksieck, 1995, p. 27 et suiv.; Philippe Antoine, *Les Récits de voyage de Chateaubriand*, Champion, 1997, p. 171 et suiv.



絶えず話題をつないでいく。その間「作者」は常に読者の眼前にあり、作品内で絶対的な位置と存在感を獲得していくのである。

こうした特権化された「作者」のあり方が、きわめて直截的な言葉で表現されている箇所がある。先ほど触れたアテネに関する記述である。この重要な訪問地について、作家はただ参照すべき著作の名前を列挙するだけで、実際に町の様子を自分の言葉で描写することはなかった。それではそこでは代わりに一体何が語られているのだろう。実は作者自身について語られるのである。

先人たちを犠牲にして学識をひけらかすのではなく、私はこれまで従ってきた計画通りに、アテネで過ごした毎日、毎時間の私の移動や感情を報告しよう。今一度繰り返すが、この旅程は旅行記と言うよりはむしろ、私の生涯のある一年に関する覚え書と見なされるべきものである<sup>37</sup>。

作者はアテネの町について語るという労力を、他人の著作を引くことで一切省略した。その代わりに彼は、他ならぬ自分自身について語ると言うのである。本来語りの「主体」であるべき存在が、反対に語りの「客体」となる。これこそがシャトーブリアンの旅行記の大きな特徴である。

こうした主客の転換を可能にするのは、これもまた「旅行記」というテキストの持つ柔軟性のおかげであるということも指摘しておかねばならない。シャトーブリアンは、「規則なき」ジャンルとしての「旅行記」の特性を十分に意識している。作家は初版の序文において、自らの筆の運びの自由さについて次のように語っている。

この『旅程』のような著作においては、最も深刻な考察から最も打ち解けた物語へとたびたび移行せざるを得なかった。ギリシアの廃墟についての夢想に身を任せるかと思えば、旅行者のさまざまな気遣いへと舞い戻り、私の文体は必然的に、私の思考と運命の動きに従うことになったのだ<sup>38</sup>。

「旅」さえ話題になっているのであれば、何をどのように語ってもよいというこのテキストの性質が、こうした自由な話題の転換を可能にする。こうして『パリからエルサレムへの旅程』という作品は、きわめて多様な文章によって構成される一種のアマルガムとなる。そこではスパルタの跡地についての学術的な論考が展開されるかと思うと、次の瞬間には作者の幼年時代の思

<sup>37</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 859.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 702.

い出へと話は飛ぶ。聖地を管理するトルコ人たちの暴虐が激烈に告発されたかと思うと、北米大陸の森や湖の美しさが詩的な情景を持って想起される。作家のペンは多彩な文体を駆使しながら、さまざまな話題を縦横無尽に行き来する。

結局のところ、そこに見られるのは、ひとつの「旅の報告」などという狭い枠組みに収まるものではない。読者の前に現れるのは、ひとりの人間、ひとりの作家の全体像なのである。

そもそも人はいたるところに作者というよりは人間を多く認めるだろう。私は永遠に自分について語るのだ<sup>39</sup>。

こうしてシャトーブリアンの「旅行記」は新たな地平を獲得する。それまでの「旅行記」は、語りの内容——異国の風変わりな景色や、危険を伴った旅行者の冒険——によって読者の好奇心をかき立てた。しかしここで読者が相対するのは「旅をする作家」そのものである。作家は旅を口実に、自分自身の心理や思想について語る。テキストの向かう方向は、こうして「外界」から作家の「内面」へと移る。『パリからエルサレムへの旅程』において、「旅行記」は「自伝」へと近づき、さらに言えば、モラリスト文学の伝統にも接近していくのである。

### 終わりに

ヴォルネーは『シリア・エジプト紀行』の序文で、自分の旅行記の体裁について次のように語っている。「あまりにも長くなるので、私は個人的な冒険や、旅の順序や細部についての記述は切り捨てた。ただ全般的なタブローによってのみ論じるようにしたが、それはそのほうが事実や考えをより多く盛り込むことができる [中略] からである<sup>40</sup>。」ヴォルネーが身をもって任じる「実証的旅行者」の立場からすれば、学術的記述こそが価値を持つ。したがって旅行中の彼の体験や旅にまつわる思い出などは枝葉末節に過ぎず、取り上げるだけ無駄とされるのである。

シャトーブリアンが『パリからエルサレムへの旅程』で行ったのは、その反対である。彼は確かに旅行記の学術的側面を軽視したわけではない。しか

---

<sup>39</sup> *Ibid.*

<sup>40</sup> Volney, *Voyage en Syrie et en Égypte*, éd. cit., p. 15.

し彼は、ヴォルネーがその旅行記から切り捨てた要素を拾い上げ、それを作品の前面に押し出す。シャトーブリアンは、「旅行記」の中に「自分について語る」という自伝的言説を取り入れるわけである。これによりこの作品は、それまで「旅行記」がたゆたっていた領域から、一気に「文学」の高みへと駆け上がる。

それは確かに斬新な試みであった。「旅行記」とは異国の情景を描き出すものと思い込んでいた当時の読者には、「作者」のことばかりが話題にされるシャトーブリアンのテキストは当初、異様に映る。スタンダールは一読して「これほど鼻につくエゴティズム、エゴイズムは見たことがない<sup>41</sup>」と切っ捨てているし、サント=ブーヴもまた「自分の外に出ないのに、これほど世界を駆け回る必要があったらどうか<sup>42</sup>」と疑問を呈している。しかしまさに「旅行記」に導入されたこうした作者の「自分語り」こそが『パリからエルサレムへの旅程』がもたらした革新なのである。

しかしだからと言って、この作品が「旅行記」であることを止めるわけでは決してない。当たり前のことだが、『パリからエルサレムへの旅程』はシャトーブリアンの聖地巡礼の旅がなければ、決して書かれることはなかった。この前提の意味を理解するためには、次のエピソードを見れば足りる。キプロス島の近くを航海しているとき、旅行者は、船に一羽のツバメが飛来するのを目にする。その姿は作者に、幼い頃の思い出を呼び起こさずにはいられない。

幼年時代に、何とも言えない悲しげな喜びを感じながら、秋の空にツバメが飛んでいくのを何時間も飽かずに眺めたのを思い出す<sup>43</sup>。

そしてこの思い出は、さらに作者がかつて北アメリカの大自然の中で目にしたツバメのことを思い起こさせ、思い出は綿々と増殖していく。しかしこうした記憶の連鎖のきっかけとなったのは、あくまで作者がシリアの海の上で見たツバメであることに注意しなければならない。時系列に従う形で思い出が順次呼び起こされるのが「自伝」だとすれば、ここに見られるのは決して「自伝」ではない。作者に思い出を呼び起こすのは、旅の偶然なのである。

<sup>41</sup> Cité par Jacques Boulenger, *Candidature au Stendhal Club*, Le Divan, 1926, n° 2 (b), p. 130.

<sup>42</sup> Sainte-Beuve, *Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire*, Garnier Frères, 1861, t. I, p. 398.

<sup>43</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 959.

シャトーブリアンにとって「オリエント旅行」とは、自分について語るためのひとつの「口実」の役割を果たすのである。